明治時代の植月（植月村誌抄録）

合併による植月村の発足後間もない明治二十六年に植月村誌が発行されました。 総ページ数 82 ページの小冊子ですが、行政の体制から教育、司法、事業、災害、名所旧跡に至る植月村の沿革が記載されており、当時の植月の様子や伝承を垣間見る事が出来ます。 その中から、総論と名所旧跡・人物の項目を抜粋要約して記載します。 原文は文語体ですが口語体に直しております。なお、うえつきむらホームページに文語体の文章を掲示しておりますので興味のある方はご覧ください。

総論

明治二十二年に市村制が施行され、同年六月植月北、植月東、植月中、平の四村は合併して植月村となった。（註　後明治三十四年　平は勝間田村に編入）植月の名称はこの四村に現在の北吉野村大字上町川を合せた一つの郷名である。伝承によると、昔上町川の御所野に槻（ケヤキの古名）の大樹を植えたことより植槻村と呼んだが、その後植月の文字に転化したとのことである。この伝承は明確な根拠はないが、一つの郷として氏神を祭り守っていることや共同の縁故が有ると言うことは誤りのない事実である。

村は勝北郡の中央南端にあり、東は古吉野、吉野の二村に界し、南より西は勝南郡豊国、勝間田、高取の諸村及び本郡広野、勝加茂の二村に接し、北は新野村に連なっている。 東西一里十丁（約五キロメートル）、南北二里二十丁（約十キロメートル）である。土地の起伏は、北方は那岐山麓に位置するため高原起伏し、南下するに従いしだいに低下する。全村おおむね山野であり耕地は少なく、東南境に至ってはしだいに高く深い山谷がある。 南方は勝間田に接している。国道東西に通じて、南北に開けていると言っても、その九分強は他村に属しており、自村は十分の一に満たない。

戸数は四百五十余り、人口は二千六百余りで、多いところで数十戸、少ないのは二三家の集落が、山原あるいは田圃の間に散在し、小さい道を通じて、隣近所が相寄り相助けながら生業を営んでいる。 道路について言えば、車馬が往来できるのは古吉野村より斜めに西南廣野村に通じるもの（註　津山真加部街道か）及び勝加茂村から勝南郡に至る（註　楢植月道か）一等里道と東北古吉野村より蜿曲して廣野村に至る（註　河原植月道か）三等里道があるのみである。この頃は、官用が頻繁であるため日本原、勝間田村間の時々人力車を用いることがあるが細い坂道がようやく通ずるのみで十分ではないと言わざるを得ない。

植月周辺古道地図 （勝央町誌資料編より）

用水としては、飲料は常に井水を用い、洗滌沐浴等を河水によるのは平の一部だけであり、毎家井堀を備えて、灌漑は概して溜池用水に依る。 河流に依っ

て耕作できるのは僅かに滝川沿岸の一小部分だけである。 このためどうしても干ばつの恐れから免れることができない。 最近民間の事業の発達に伴い、開拓地を始め、しばしば干ばつの災害のある土地は水田から桑畑に変えているのは時代の恵みということではないだろうか。

植月村の名所旧跡・人物伝

日吉神社

大字植月北字宮代。 社格 郷社 （註 明治四年太政官布告による。大中小の官幣社、別格官幣社、大中小の国弊社、府・県・郷・村社および無格社に分かれる。） 元日吉山王宮と称した。祭神は大山咋命（おおやまくいのみこと）。 氏子は大字植月北、植月東、植月中。祭日は陰暦九月二十七日。

白鳳十四年（西暦 685 年）伊香色男命の後胤で内田臣の遠裔内田菅麿が近江の国阪本日吉神社分霊を迎祭し植月郷総社とした。治暦四年（1068 年）民力を以って社殿再建。永正五年〈1508 年〉郷司植月彦治郎基佐が社殿改造。万治二年（1659 年）森内記長継が再建し祈願所とした。

昔は、仏式で祭っており観音寺が掌宰していた。神体も木像であった。今でも仁王門の遺跡等がある。仁王門と云う地所が馬場の中央東側にある。さらに、郷中に御所野、椿森、杉、中、八幡二社、寶大の七末社があり、八箇の神輿を一所に祭っている。今なお年始に七社巡りと言って、前記の神社を巡拝する習慣がある。今では、杉神社のみ同御幸場に奉送している。

植月角力とは、本社の祭りの余興に供える相撲を言う。古老の俚語に「新野祭礼、広戸大風、植月相撲、此の三者に一遭せざれば死して魔王の庁の前をすぐべからず」あるいは「ついにない日吉の角力。 角土俵。山こえこえ、その山中に一つふしぎや宮角力」など口ずさむのは昔から本社の相撲の因縁があることを表すものである。 このように植月相撲は名高く、毎年遊覧のため遠くから来る人も多かった。 しかしながら最近ではその価値は落ちてしまっているようである。

観音堂

元鳥羽山万福寺と称す。

植月北字鳥羽野。（本国三十三所六番札場）本尊 観世音菩薩。 旧像 木作高さ三尺五寸。 縁日 毎月十八日。 開基 優婆塞役行者加茂小角神変大菩薩。 刻像 役行者小角徒弟行基菩薩。 創建 聖武天皇神亀三年（726 年〉。

中興 戸屋瀬門、山城国鳥羽町の人。 当時、鳥羽野長者のち戸屋の屋号を鳥家の文字に改め姓とした。本尊を山城鳥羽より送ったが住んでいるところを故郷に因んで鳥羽野と称したようである。

毎年陰歴六月十八日に夏祭が催された。昔は参集の人が立錐の余地もなかった。 果物を商うものや芸をするもの等、数百店が山地に稀に見るにぎやかさであったが、今は大いに衰えている。 もと数十戸の檀越があったが、観音寺の兼帯となり、明治五年檀家がないという理由で寺号が没収された。 同二十二年十一月二十五日払暁火災で堂宇鐘楼ことごとく失った。 有志が霊場の荒廃を悼んで浄財を募り新たに殿堂を築き梵鐘を改鋳し、同二十四年九月落成式を挙げた。

小山城址

宮山城とも言う。 植月中中央。 本丸と称するもの其跡十三平方間。 二の丸十八平方間あり。 元弘〈1331 年～1334 年〉の頃、植月彦五郎佐重の築いたものである。 後、永正年間（1504 年～1521 年）植月彦治郎基佐

が在城した。 一族の佐高、佐光、重教は皆浮田直家、秀家に隷属し、佐光の子孫は当地に土着し、重教は久米南條郡一方村佐良山村大字一方に移住した。

江田ヶ城址

金山城とも云う。 植月中東南部。 結構本丸東西拾六間南北三拾四間。 史書に大谷佐助の築く所とある。今はただ片瓦断礎が散見するのみである。

千本桜

幹より大枝や少朶が多数伸びているためこの名称がある。 植月中大沢にあり、数百年の古木で一株千本の名がある。 当地國政氏の祖赤松某が植えたと伝え聞いている。 明治十四年に次第に勢いがなくなり同十七年枯死に至った。 この樹を詠じた人はすこぶる多い。

植月八景

古来、近江八景に擬して呼ばれた。( )内近江八景

御所野暮雪 （比良暮雪）

今の北吉野村大字上町川 氏神の境内

鳥羽野落雁 （堅田落雁） 鳥羽野観音堂

長尾秋月 （石山秋月） 植月中長尾山

日吉一ッ松 （唐崎夜雨） 日吉神社前弁財天祠の南に其跡がある。今、松の下と称する耕地がある。

八幡夕照 （瀬田夕照） 大字平八幡社

弘誓山晩鐘 （三井晩鐘） 植月東観音寺

椿森帰帆 （矢橋帰帆） 元植月北西南字椿森の地

林の尾晴嵐 （粟津晴嵐） 杉宮池のある地

弘誓山観音寺

本国三十三個所五番札所。本尊聖観世音菩薩。 植月東字谷西上に在り。比叡山延暦寺直末。 天安年間(857年～859年)比叡山第二祖慈覚大師創建。 本像行基菩薩の作。 初め吉野村大字田井にあった。その跡は田地となり、観音免と言う。 天文十三年(1544 年)洪水のため堂宇、書類、宝器、ことごとく流失し、創建以後七百余年の経歴が滅亡した。 その東南三丁余に経塚がある。 歌に(経塚のしるしの松の夕嵐たへぬみのりのこへかとぞきく)とある。 つまり古霊場納経の遺証である。当時の住職實觀は再び災害に遭うことを恐れ、高燥の位置に移そうとしたが果さずして亡くなった。 のちに沙門圓慶は遺志を継ぎ慶長5年(1600 年)秋、現在の地に伽藍を築造した。 故に圓慶を中興開山第一世としている。

本堂、釣屋、客殿兼位牌所、庫裡、仁王門兼鐘楼、中門、東門、供部屋、雑物部屋、土蔵。

阿弥陀堂 本尊阿弥陀如來。 寛永八年(1631 年)創建。もと宗祖智者伝教二師の像を安置していたため祖師堂と称する。 寛文二年(1662 年)畳岩山永昌寺(遺跡大字平たゞみ岩にあり)が無住となり、その本尊弥陀、観音、勢至、地蔵像及び十王像を移して合祀した。

弁財天堂 寛永六年(1929 年)住職高慶創立。 安永六年(1777 年)同慈慶再建。

弘慶山慈圓寺

本尊 元三大師。 植月東字弘助頭(弘誓山下隣)にある。 貞觀三年(861 年)慈覚大師が創立した。 もと植月北字宮代にあり、日吉山神宮寺と称した。 貞享三年(1686 年)本国で悪疫流行した。 国主森長成は除疫のため、元三大師の像を加茂川の東西に安置した。 当寺はその一つである。 正徳四年(1714年)植月東村の人東弘慶が寺を己の所有地に転地しようとしたが出来なかった。 そして新たに山号寺称を設けた。故にこの名がある。 慈圓は当時の住職

の法号である。 宝暦三年(1753 年)住職印海は寺を現地へ移し、寛政七年(1795 年)現住晃慶が本堂を再建した。

本堂、客殿兼靈牌所、鐘楼、通用門、雑物部屋。

村社

八幡神社

植月東字堀池にあり。 文亀三年(1503 年)豐前国宇佐八幡社誉田別尊の分霊を遷祀した。

宝大神社

植月東字奥常にあり。 天文元年(1532 年)少彦名命《すくなひこのみこと》を祭る。

中神社

植月東字宮ノ谷にあり。 天文元年(1532 年)大己貴命《おおなむちのみこと》を祀る。

八幡神社

泰平元年〈註 年号不明〉宇佐八幡神社の分霊を遷し祭る。大字平にあり。

杉神社

植月中字杉宮にあり。 勘請不詳。 本村社寺中もっとも古いと言われる。 建治三年(1277 年)、万治三年(1660 年)等再三改造の記録がある。

豐受神社

植月北字高根にあり。祭神は豐受大神なり。治暦四年(1068 年)創立。

泰禅上人

東西至る所、所々に長尾山道と刻まれた石標があり長尾山の盛時を懐顧することができる。 それが世に顕れるのは泰禅上人の偉徳による。上人は安永年間(1772 年～1781 年)の人であり、広戸村大字広戸市場字上ドウガチの芦田氏に生まれた。 家は代々農夫であった。 幼時父兄に従って耕作するに一昆虫をも殺さなかった。 人が若し生物を捕えたらすぐにそれを放してやった。 父兄はそこで天性の慈悲不殺であると思い本村観音寺に連れてきて、弟子入りをさせた。 妙法涅槃の深理を教えなくても悟り、無我清浄、錫を駐まるところ徳華粲爛であるのは真如の光明を放つものであろうか。 終身敝衣破屐、一見乞丐者と誤る。

言い伝えではかつて雨に遭った時、ある家で雨具を奨め、晴れたらどこにでも托して置いておくように言った。 上人はすぐに傘を路傍の木の枝に掛けたそうである。 このことからその行状を追想して欲しい。 身は山間の一堂にあっても徳化は遠くまで伝わった。 大阪地方の施主が寄進した仏像のように今も残っているものが甚だ多い。 晩年、勝南郡河辺村の某庵を創建しようとして津山町大圓寺に滞在中に病で亡くなり河辺村に葬った。 墓は碑所々にあり、現在天台宗各寺にその像を安置したものがあるがこれが肖像であると言う。

長尾山は沙美泰禅の中興した所である。後、金光坊の号を付けたもので植月中の東南滝川の西岸にある。坂道は険しく四方に通じて松緑苔青の所に一宇を設けた。 本堂、客殿、鐘楼は本堂の縁に設け、庭に羅漢を置いている。(註 金光坊は大正年間に焼失し、現在の場所に移転)

鬼馬

植月中村の人。 藤巻氏。 字は多聞之介。 父を掃除之丞と言う。 家世々神官を職とした。 多聞は眼科医もしていた。 幼い時より聡明で俳諧を嗜み巖峯亭鬼角(勝南郡北和気村馬伏)を師とす。 全国殆んど行ってないく所はなく名山大沢を跋渉して常にすぐれた詩歌を詠んだ。 所々石に刻んだり書に遺すものが多いと言う。 明治元年没。 紫竹亭と号した。 鬼馬はその徘名である。